

○ヒマラヤのシダの植物地理 (伊藤 洋) Hiroshi ITO: Geography of the Himalayan ferns

私は東京大学インド植物調査隊（隊長原寛教授）が 1960 年と 1963 年の 2 回にわたって採集したシダを調べる機会に恵まれた。先般終って結果を報告したついでに、私の分担した部分（全体の約半分）についてヒマラヤのシダの地理的分布を考えてみた。取り扱った種類の数（変種以下は省略）はゼンマイ科 2, カニクサ科 3, ウラジロ科 3, ワラビ科 52, ミズワラビ科 1, シノブ科 9, キジノオシダ科 1, オシダ科（これは全部でない、オシダ属など 12 属）35, シシガシラ科 1, チャセンシダ科 13, シシラン科 9, デンジソウ科 1, サンショウモ科 2, 計 132 である。ただしこのうちの 1 種 (*Pityrogramma calomelanos*) は栽培品の逃げ出したものと思えるので、これを除外し、結局 131 種について考えることにした。調査地域は第 1 次がダージリンとシッキムで、標高 250 m から 4000 m にわたっており、第 2 次は東部ネパール、200-3000 m である。したがって植物帶的には幅が広く、熱帯から亜高山帶までを含んでいる。

おもな地方との共通種 まず日本との共通種は 131 のうちの 36 で、割合をとると 27% となる。例をあげると、ゼンマイ、オニゼンマイ、カニクサ、コシダ、コバノイシカグマ、ホングウシダ、イワヒメワラビ、オオバノイノモトソウ、ナチシダ、ホラシノブ、ホウライシダ、タマシダ、ジョウレンシダ、ホウビシダ、シシランなどである。次に台湾との共通種は 85(65%) で、今まで台湾特産とされていて今回ヒマラヤにも産することがわかったものも数種ある。中国との共通種は 90(69%)、この値は台湾のと比べて案外小さいが、これは中国特に雲南省方面のシダについての発表が最近少ない（または手にはいらない）ためであると思う。陸続きの近い場所だからもっと多いはずである。最後にヒマラヤ固有種は 6、これは 5% に当る。

分布の型 これは次の 4 型にまとめることができる。

- 1) 寒い方のもので、シベリアやカラフト方面から南下してヒマラヤでとまっているもの。これは 4(3%) しかない。日本に関係あるものとしてはゼンマイ、オニゼンマイがある。
- 2) インド、インドシナ、マレイ諸島など、南の方に本拠をもつもので、ヒマラヤまで北上して来るもの、84(64%)。この大部分 (54) は中国および台湾にもあり、さらにそのうちの 35 は日本まで来ている（前記日本との共通種の例のうちゼンマイとオニゼンマイを除いたものは皆これの例）。同様に琉球止まりのもの 3 (ヒロハカニクサ、オオイシカグマ、ホコシダ) を数える。次にこのような南の型のうちで、台湾にあるが中国にないというものが 8、その逆のものが 9、そして最後に台湾にも中国にもない、つまりインドやインドシナの種類がヒマラヤの低い所まで来ているという形のもの、これが 13 となっている。
- 3) 北緯 25°-30° 付近で東西に分布するもの、すなわち台湾、中国南部、ヒマラヤ、

カシミル（場合によってはアフガニスタンや以西にも）と横に細長く分布するものが 37 (28%) ある。その内訳は：大体これらの地域に広く行きわたるもの 11, 中国を飛ばしてヒマラヤと台湾にあるもの 10 (スジオシダ, ケヒメワラビ, ホウライクマワラビ, サカゴケシダ, イトシシランなど), 台湾に行く中国以西のもの 14, ヒマラヤ以西のもの 2, となっている。

(東京教育大学理学部)

Summary

A half of the fern specimens collected by the Indo-Japanese Botanical Expedition to Darjeeling and Sikkim in 1960, and that to East Nepal in 1963 was allotted to me for study. They belong to the following families: Osmundaceae, Schizaceae, Gleicheniaceae, Pteridaceae, Parkeriaceae, Davalliaceae, Plagiogyriaceae, Aspidiaceae p.p., Blechnaceae, Aspleniaceae, Vittariaceae, Marsileaceae, and Salviniaceae. I have identified 131 native species in them, and classified several distribution patterns from the area occupied by each species.

○クサボケの八重咲品 (檜山庫三・小林義雄) Kozo HIYAMA & Yoshio KOBA-



Fig. 1. *Chaenomeles japonica* f. *plena* in bloom.
Specimen from the type locality. ca×1/4.

YASHI: A new form of *Chaenomeles japonica*

1966年4月23日、東京都八王子市元八王子町の城山の麓で出会ったクサボケは、どの株も八重咲きであった。大部分の花は雄性花であって、11~13枚の花弁があるが、この花弁の増加は雄蕊の弁化によるもので、雄蕊は36本内外であった。なお、この八重咲品は林業試験場浅川実験林内にあることがその後にわかった。和名をヤエクサボケとする。

Chaenomeles japonica Lindl.

forma *plena* Hiyama et Kobayashi-Yoshi, n. f.

Flores pleni. Petala 11-13.

Hab. Moto-hachioji, Hachioji, Prov. Musashi (Hiyama & Kobayashi. April, 1966), type in MAK.